

ISSN 1344—8366

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 24 号, 2021 年, 抜刷 (pp.101-105)

<書評>

伊藤伸幸監修 嘉幡茂、村上達也編

『メソアメリカ文明ゼミナール』

青山和夫 (茨城大学)

Ito, Nobuyuki, Shigeru Kabata, Tatsuya Murakami eds.,

Seminar on Mesoamerican Civilizations

Kazuo Aoyama (Ibaraki University)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』24, 2021, pp.101-105

<書評>

伊藤伸幸監修 嘉幡茂、村上達也編集

『メソアメリカ文明ゼミナール』

東京：勉誠出版 2021 年

510 頁、定価 5000 円＋税

青山和夫

(茨城大学)

1. 『メソアメリカ文明ゼミナール』の構成と内容

本書は第一部「古代メソアメリカ文明の出現背景」、第二部「古代メソアメリカの歴史」、第三部「メソアメリカ考古学と隣接科学」の三部で構成される。伊藤伸幸が監修を行い、嘉幡茂と村上達也が編集を担当し、他に計 19 名の若手・中堅の研究者がメソアメリカ文明だけでなく、過去を現在と未来につなげる最新の調査・研究の成果を取り込んで執筆している。各自が専門とする地域や分野についての基礎的な知識だけでなく、より深い知見や学会動向について概説する。伊藤が「はじめに」、嘉幡と村上が「おわりに」を執筆し、その間に計 22 章が設けられ、重要な遺跡やテーマに関する計 37 のコラムが挿入されている。

第一部は、3 章からなる。第一章「氷期に遡る最初のアメリカ人の出現とその拡散」では、出穂雅美がクロヴィス (Clovis) 文化に先立つ先クロヴィス説と DNA 研究のベリンジア・スタンズティル (滞留) 説について詳しく論じる。メキシコのキンタナロー州沿岸部の水中考古学調査によって、出穂が紹介するオヨ・ネグロ (Hoyo Negro) だけでなく海面が上昇する前に地上に点在した他の洞窟群からもアメリカ大陸で最古級の人骨 (前 11000 ～前 10000 年頃) が見つかった [Hubbe et al. 2020]。第二章「狩猟採集社会から定住社会へ」では、伊藤がメソアメリカ各地における狩猟採集、有用植物の利用と植物の栽培化、動物の家畜化、土器と土偶、定住集落に至る過程について論述する。第三章「古代メソアメリカ文明とは何か」は読み甲斐がある。村上と嘉幡はメソアメリカを異なる地域の集団が交流を深めた交流圏、密度や規模を異にする社会関係の総体と定義する。そして、社会の差異化、その差異化を含む「世界」を説明する信仰体系の物質化と地域間交流を主要素としてメソアメリカ形成を論じる。嘉幡がコラムで「冶金術」を解説する。

第二部は 10 章からなり、メソアメリカ各地の社会発展を先古典期 (あるいはそれ以前)、古典期、後古典期の順に概説する。第一章「メキシコ湾岸文化―南部地方と中部地方の古代文化」では、古手川博一と黒崎充がオルメカ (Olmeca) 文化が繁栄した南部地方と原古典期 (前 100 ～後 100 年) から後古典期 (後 1200 ～1521 年) の中部地方について詳しく述べる。コラムでは、古手川がラ・ベンタ (La Venta)、エステロ・ラボン (Estero Rabón) とゲレロ州のテオパンテクアニトラン (Teopantecuanitlán)、黒崎がエル・タヒン (El Tajín)、カントナ

(Cantona) と古典期マヤ (Maya) のコマルカルコ (Comalcalco) について紹介する。古手川が調査団長を務めるエステロ・ラボン遺跡では、オルメカ様式の玉座を含む 8 体の石彫が報告されている。それはオルメカ文化の 2 次センターとして栄えた後に衰退するが、古典期後期・終末期のビジャ・アルタ (Villa Alta) 期 (後 700～1000 年) に再び活動が活発化した。つまり、先古典期と古典期をつなぐ社会変化を理解する上で重要な遺跡といえる。

第二章「メキシコ中央高原文化—テオティワカンからトルテカ」では、村上と嘉幡がテオティワカン (Teotihuacan) における都市化と国家形成、テオティワカンと古典期前期のメソアメリカ、続古典期のメキシコ中央高原、トゥーラ (Tula) とトルテカ (Tolteca) 文化について論じる。特に「トルテカ文化」という用語をトルテカ国家という枠組みから外して、続古典期から後古典期前期に相互交流ネットワークが広がってメソアメリカで広く共有された文化とする解釈は傾聴に値する。コラムでは、嘉幡がクイクイルコ (Cuicuilco)、 Cholula (Cholula)、ソチカルコ (Xochicalco) とカカシュトラ・ショチテカトル (Cacaxtla-Xochitécatl)、嘉幡と村上が調査中のトラランカレカ (Tlalancaleca) について詳しく説明する。

第三章「アステカ文化」では、井上幸孝がアステカ (Azteca) 王国成立以前のメキシコ盆地とその周辺、18 世紀以降に「アステカ王国」と呼ばれるようになったメシーカ (Mexico) の政治体制・社会、征服後の社会と現代からの眼差しについて述べる。井上はコラムで貢納台帳、テンプロ・マヨールと市場 (ナワトル語でティアングス Tanguis) について解説する。

第四章「マヤ文化—先古典期と古典期」では、今泉和也が先古典期・古典期マヤについて詳説し、一般の人々の生活、住居と空間利用、自らが調査したティカル的一般層の人々の居住区における土器生産の痕跡にも言及する。今泉はコラムでティカル (Tikal)、パレンケ (Palenque)、コパン (Copán) とチチェン・イツァ (Chichén Itzá) について説明する。第五章「後古典期マヤ文化」では、白鳥祐子が後古典期マヤの概要、研究史、時代区分、文献史料、政治構造、経済活動・交易、建築様式及びスペイン人による征服についてそつなくまとめている。後古典期マヤに関する白鳥自身の現地調査の成果が言及されていれば、より良い章になったであろう。白鳥は、コラムでウシュマル (Uxmal) について述べる。

第六章「南東部太平洋側文化」では、市川彰がメキシコのチアパス州からエルサルバドルにわたる南東部太平洋側地域の低地と高地における土器の起源、定住化の過程、公共建造物の建設、石彫、都市化、厚葬墓の出現、初期王権の誕生、環境適応、移住、火山噴火といった多岐なテーマについて論じる。コラムでは市川と八木宏明がタカリク・アバフ (Tak'alik Ab'aj)、チャルチュアパ (Chalchuapa)、カミナルフユ (Kaminaljuyú) とホヤ・デ・セレン (Joya de Cerén)、市川が火山灰編年学について解説する。エルサルバドルのイロパンゴ (Ilopango) 火山の大噴火 (後 400～450 年頃) が社会に与えた影響については破滅的な被害を強調する先行研究が目立つ。市川の調査によれば、火口から半径 100 km 圏内では火山からの距離や方角、遺跡の規模や性格によって被害や復興の過程が多様であった。

第七章「オアハカ文化—サポテカとミシュテカ」では、柳澤佐永子と福原弘識が前 8000 年頃から後 1521 年までのオアハカ文化について通時的に論述する。コラムでは福原がモンテ・アルバン (Monte Albán) とサン・ホセ・モゴテ (San José Mogote)、柳澤がミトラ (Mitla) について紹介する。オアハカ地方では日本人研究者がまだ本格的な考古学調査を実施しておらず、今後の活躍が待たれる。

第八章「メキシコ西部文化」では、吉田晃章がシナロア州、ナヤリ州、コリマ州、ハリスコ州、ミチョアカン州とグレロ州に広がるメキシコ西部の社会発展を概観する。吉田が調査するロス・アルトス (Los Altos) 地方のロス・アガベス (Los Agaves) 遺跡や周辺の岩絵群の調査成果について十分に紹介されていれば、より魅力的な

章になったであろう。コラムでは、今泉がワチモントン（Huachimonton）、ラ・ケマダ（La Quemada）とツィンツンツァン（Tzintzuntzan）を解説する。

第九章「メキシコ北西部文化」では、荒川史康がメキシコ北西部のソノラ州とチワワ砂漠について、先行研究、文化史、将来の研究の展望をまとめる。今泉がコラムでカサス・グランデス（Casas Grandes）を紹介する。

第十章「中央アメリカ文化」では、長谷川悦夫が中央アメリカ南部のニカラグア太平洋岸とコスタリカ北西部を扱い、自らが発掘したマナグア湖畔のラ・パス（La Paz）遺跡の成果にも触れる。今後の現地調査によって問題になっている後古典期の土器編年を整備し、言語学や民族史で示されるメソアメリカ系の民族集団の移住の図式と考古資料の乖離の実態について解明されることが期待される。評者は、ニカラグア、コスタリカやパナマという中央アメリカ南部における日本人研究者のさらなる活躍を楽しみにしている。

第三部は9章からなり、考古学と隣接科学の連携によってメソアメリカ文明の実像により広く、より深く迫る。第一章「形質人類学」では、鈴木真太郎が古人骨の性別と死亡時年齢、食性と食文化、日常生活、文化的肉體加工、移民動態といった生物考古学研究の成果について事例を紹介する。鈴木によるグアテマラ太平洋岸のレイノサ（Reynosa）遺跡の食性復元やホンジュラスのコパン遺跡から出土した古人骨のストロンチウム・酸素同位体を用いた移民動態の成果は説得力がある。コラムでは鈴木がDNA分析の技術的ブレイクスルー、瀧上舞が炭素・窒素同位体分析による古食性推定について解説する。瀧上自身によるメソアメリカの試料の同位体分析が近い将来に行われることが待望される。

第二章「民族学・文化人類学」では、小林貴徳がメキシコ人類学の歴史的流れと新たな地平について紹介する。21世紀のメキシコの社会人類学研究の多くは、先住民の文化伝統を先スペイン期からの連続性に配置するだけではない。それらは近代社会に対するアンチテーゼあるいは500年にわたる文化的抵抗の実践として捉え、先住民族の同時代性に照準を定めていることが注目される。

第三章「歴史学」では、井上がメソアメリカの主要な史料（絵文書とクロニカ）、史料批判、今後の研究の展望について述べる。史料の批判的で慎重な読解によって、先スペイン期社会について新たな研究テーマ、知見や視点を提供し、従来の解釈の問題点を明らかにできる。

第四章「碑文学」では、柳澤がメソアメリカの文字の概要、暦、マヤ文字、サポテカ文字、ミシュテカ（Mixteca）＝プエブラ（Puebla）文字（アステカ文字やミシュテカ文字を含む）について解説する。第五章「絵文書学」では、柳澤が後古典期後期（後1200～1521年）と植民地時代初期（16世紀）に作成された絵文書の概要を述べる。後古典期後期の絵文書は、マヤの絵文書、ボルジア（Borgia）グループの絵文書とミシュテカの絵文書の3つに分類される。マヤ以外の絵文書では、ミシュテカ＝プエブラ様式の絵文字がベースになっており、特定の言語と対応していないので様々な言語で読むことができる。柳澤によれば、ミシュテカ＝プエブラ様式は、その起源地であるプエブラ・トラスカラ地方からオアハカ地方までがメキシコ中央高原から南下する交易路上にあり、後古典期後期に異なった言語を話す諸民族が婚姻などで同盟を結んだ結果として発達した。

第六章「保存修復科学」では、喜多裕子が保存修復科学の3つの主目的である①現状記録、②材質・構造の把握、③保存修復材料の評価について説明し、メソアメリカでどのような研究が実際に行われているかを紹介する。第七章「博物館学とパブリック考古学」では、村野正景が博物館学とパブリック考古学を概観する。メソアメリカの一部の先住民が考古学の実践や解釈に異議を申し立てて、先住民の歴史が考古学者に植民地化されていると主張している。こうした批判を乗り越える実践、たとえば、先住民が考古学調査や成果の解釈に参加する権利、表現する権利、同化しない権利などが問われている。「参加型考古学」や「コミュニティ考古学」では、考古学者が考古学者以外の人々と共に遺跡保護や考古学成果の利用に関与する。エルサルバドルでは村野を中

心に先スペイン期の土器装飾の復元実験に考古学者、陶芸家、学生や地元住民などが参加し、成果を学術目的だけでなく、アート創作、技術教育や観光支援に活用している。2018年にはエルサルパドルで中米初のパブリック考古学の国際シンポジウムで開催され、当該地域における意味あるパブリック考古学が形成されつつある。

第八章「考古科学」では、村上がテオティワカンの漆喰サンプルから薄片を作成し偏光顕微鏡で観察して、記載岩石学とカソードルミネッセンス（CL）法で各サンプルの組成を分析した。後450年以前の漆喰の組成はかなり標準化されており、テオティワカン国家と密接な関係にある漆喰製作の専門集団が存在し、国家主導で漆喰生産が統御されていたと考えられる。ところが後450～650年には建造物ごとに石灰の質がまちまちになり、混和剤も他地域から搬入された火山灰（火山ガラス）以外の鉱物（長石など）の割合が増えた。村上は、この変化を日常的に使う資源を獲得するための国家主導の地域間交易ネットワークと専門集団による集権的な生産体制が分断された証拠の一つと解釈する。また村上と嘉幡らは、トラランカレカ遺跡のセロ・グランデ（Cerro Grande）建築複合体で無機化学分析 ICP-OES を使った土壌分析を行った。北側の最終時期の生活面から比較的多量のリンと食料の貯蔵・調理に使われた土器片が比較的多く見つかり、実際に食料が生産、消費あるいは廃棄された蓋然性が高い。

第九章「動植物学」では、浪形早季子と村上が動植物遺体の分析方法を概観し、動植物利用を通して先スペイン期メソアメリカの生業及び文化・社会的側面に焦点を当てる。動植物は食料、衣類や容器、道具などの日常の道具、宗教儀礼や薬草、貢納品などとして活用された。浪形と村上は、メキシコ西部バルサス川中流域のシワトシュトラ（Xihuatoxtla）岩陰遺跡から出土した磨製石器と打製石器に付着した前7000年頃のトウモロコシのデンプン粒及び、磨製石器や土壌サンプルから検出されたトウモロコシの穂軸のプラント・オパールに関する重要なデータを紹介する [Piperno et al. 2009]。初期のトウモロコシの穂軸は小さかったので食用ではなく茎から砂糖を摂取して酒を造ったという仮説がある [Smalley and Blake 2003] が、初期のトウモロコシの穀物としての重要性を再評価する必要がある。コラムでは浪形が貝塚と漁撈、井上がカカオについて解説する。

2. 日本語で最も詳細なメソアメリカ文明の専門書と古代アメリカ研究の未来

本書はこれまでに日本語で書かれた最も詳細なメソアメリカ文明の専門書である。評者は伊藤と同学年であるが、評者が1986年にホンジュラスで青年海外協力隊の考古学隊員としてマヤ文明研究の道に足を踏み入れた当時は日本人のメソアメリカ研究者が書いた体系的なメソアメリカ文明の概説書はなかった。本書の執筆者の多くが、これから日本のメソアメリカ研究を背負っていく中堅・若手研究者であることは喜ばしい限りであり、隔世の感を覚える。一方で執筆者22名のうち女性は5名であり、日本人のメソアメリカ研究及び古代アメリカ学会のジェンダー・バイアスが反映されている。また各章に引用文献が挙げられており便利であるが、一部のコラムに引用文献がない（たとえ章末に挙げられていたとしても）のは読者に不親切といえる。執筆者の現地調査の成果が明確に述べられている章がある一方で、残念ながらオリジナルな研究成果やその学術的位置付けが明確でない章も散見される。読者は日本人である執筆者が具体的にどのような調査研究を実施しているのに興味関心をもつものであるから、読者サービスを怠らないように注意しなければならない。

総体的に評者は極めて興味深く本書を拝読させていただいた。最新の研究方法と成果を提供する本書の刊行を心から祝福し、歓迎したい。伊藤は「はじめに」に本書が「メソアメリカ文明の研究を志望する大学生や、興味をお持ちの方々にとっての教科書になれば幸甚である」と書いている。しかし、大学の学部の教科書として使用するにはやや高額である。また本書は一般向けの概説書からより一歩踏み込んだ内容であるため、メソアメ

リカ研究を専門とする研究者や大学院生向けといえよう。いずれにせよ一人でも多くの方々が本書を手にとられ、メソアメリカ考古学や古代アメリカ研究に関心を持っていただけることを期待したい。

日本人研究者が日本語で書いたメソアメリカ文明に特化した概説書は実はそれほど多くない〔青山 2007; 青山、猪俣 1997; 井上 2014; 小林 1995〕。それらの概説書は本書のように専門的で詳細ではないが、安価でより広い読者に向けて発信してきた。また複数の大学で教科書として活用されている。学者は論文や本を書いてなんぼのもの、「Publish or perish」である。たとえば、1997年に刊行された『メソアメリカの考古学』を執筆した時には、評者が34歳、猪俣健が35歳の若造であった。これから日本のメソアメリカ研究を背負っていく中堅・若手研究者には、現地調査の成果をスペイン語で現地社会に還元すると共に国際査読雑誌に英語で世界に積極的に発信するだけでなく、是非とも日本語でメソアメリカ、各自が専門とする地域や分野の専門書・一般書をどんどん出版して古代アメリカ研究の裾野を広げていってもらいたい。彼ら彼女らが内からふつつと湧き出る熱い学問的情熱と不断の努力の積み重ねによって研究成果を国内外に発信し続けることによって、本書の学術的価値と日本人のメソアメリカ・古代アメリカ研究の水準がさらに高められていくと評者は確信している。

【謝辞】

2名の査読者から極めて建設的かつ有益なコメントを賜った。記して謝意を表したい。

参考文献

青山和夫

2007 『古代メソアメリカ文明—マヤ・テオティワカン・アステカ』 講談社。

青山和夫、猪俣健

1997 『メソアメリカの考古学』 同成社。

Hubbe Mark, Alejandro Terrazas Mata, Brianne Herrera, Martha E. Benavente Sanvicente, Arturo González, Carmen Rojas Sandoval, Jerónimo Avilés Olguín, Eugenio Acevez Núñez, and Noreen Von Cramon-Taubadel

2020 Morphological Variation of the Early Human Remains from Quintana Roo, Yucatán Peninsula, Mexico: Contributions to the Discussions about the Settlement of the Americas. *PLoS ONE* 15(1):e0227444.

井上幸孝（編）

2014 『メソアメリカを知るための58章』 明石書店。

小林致広（編）

1995 『メソアメリカ世界』 世界思想社。

Piperno, Dolores R., Anthony J. Ranere, Irene Holst, Jose Iriarte, and Ruth Dickau

2009 Starch Grain and Phytolith Evidence for Early Ninth Millennium B.P. Maize from the Central Balsas River Valley, Mexico. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 106:5019-5024.

Smalley, John and Michael Blake

2003 Sweet Beginnings: Stalk Sugar and the Domestication of Maize. *Current Anthropology* 44:675-903.

原稿受領日 2021年8月12日
原稿採択決定日 2021年8月31日

